みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

人質まで値踏みされる不条理
(変わるネパールと変わらぬネパール：グローバル化した世界に暮らす, 第11回)

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2014-03-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 南, 真木人
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5097

人材派遣会社の待合室。ビデオでマレーシアでの作業風景が流れている（2001年）

変わるネパールと変わらぬネパール

グローバル化した世界に暮らす

第11回

国立民族学博物館助教授
写真・文 南 真木人

みなみ・まきと　1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著／『エスノ・サイエンス』（京大出版会　2002年）、『文化の生産』（ドメス出版　1999年）、『アジア読本ネパール』（河出書房新社　1997年）など。

さる八月末、ネパール人の人質十二人がイラクの武装勢力に殺害された。報道によれば、被害者は料理人や清掃人として働くためイラクに入国した労働者であり、イラクで働くネパール人はすでに一万七千人に上るという。これが、派兵した軍人やNGOの職員でなく労働者であるところに、ネパールがおかれた厳しい現実が浮き彫りになる。

男性の湾岸諸国への出稼ぎは、一九八〇年頃から始まり最近急増してきた。ネパールの国勢調査（二〇〇一年）によれば、サウジアラビアに六万七千人、カタールに二万四千人、アラブ首長国連邦に一万三千人のネパール人が暮らす。こうした出稼ぎ従事者の一部が、イラク復興という危険だが相対的に高給が得られる労働市場に参入している。彼らの就労先は建設現場作業員と警備員が多い。とくに私企業に雇われる武装警備員の大半は、英国軍やインド軍の退役グルカ兵である。もとよりイラクにおけるネパール人は、米軍の尖兵と映りやすい立場にあったのだ。

彼らがどの程度、危険を承知でイラク入りしているかはわからない。だが、少なくとも母国語による十全な情報を、日本人のそれと同じほどに得ているとは思えない。中東にはネパールの特派員が一人しかおらず、その人をして「人質は直に解放されるだろう」と楽観的な現地レポートをしていたからだ。他方でネパール政府は、在カタールのネパール大使をアルジャジーラのテレビ番組に出演させたが、人質の解放に向けた実質的な交渉のチャンネルを作れず、打つ手がないまま事件はおきた。そこには、世界情勢や情報にアクセスする経済的・政治的な能力が弱い個人や国家が被害をこうむる、という構造的な不条理がある。武装勢力にしても人質を値踏みするかのように、あっさりと全員を殺害した。これが大国の人質であれば、違った対応をしていたのではないか。

人質まで値踏みされる不条理

事件後もイラクのネパール人は状況を楽観視し、出国しないであろう。慢性的に就労先が不足し、マオイストの内乱が続くネパールより、戦時下のイラクの方が少なくとも雇用があるからだ。ネパール人は、海外の低賃金労働に就く自らを「ネパール人とジャガイモはどこでも手に入る」と自嘲的に語る。冷酷なことだが、他に選択肢がない弱者にとって楽観と自嘲は、自らの境遇を納得させる最後の自己防衛手段なのだ。